

うちのまち

vol.06



TAKE ACTION
YOSANO BRANDING

山田区民運動会のムカデ競走は地区対抗。ご近所で息を合わせてゴールを目指す。野田川地域の地区運動会は熱かった



リレーで勝利し、文字通り「跳び上がった」喜ぶ下山田上地地区の皆さん

ご近所はチームだ

秋は運動会の季節。筆者は「運動会＝学校行事」と思っていたが、野田川地域には地区対抗の運動会があって、隣の集落に負けまいと夜な夜な特訓までして本番に臨むらしい。「え～、そんなことしても人が集まるはずがないでしょ」。私は内心そう思いつつ、グラウンドを訪ねてみたのだった。

文・安部拓輝 写真・青柳聡史

毎晩みんなで特訓 本気の戦い

午後8時の江陽中。暗いグラウンドに玉入れの籠が立っている。周りには親子のシルエットが浮かんだ。最後まで黙々と紅白の玉を投げるお年寄り一人。81歳の牛田富美代さんだ。腕に5個の玉を抱え、常に3つは籠に入れるが、「アカン。3つしか入らん」。え？3つで不満なの？隣にいた次男の廣之さん(55)も狙いをすませながら言った。「5個中3個入らない人は、玉を拾って渡す役をしてほしい。尾崎が優勝するには玉入れて勝つのが絶対なんだ」。玉入れなんて小学校低学年がすることだと思っていたが、ここでは大人が知恵を結集させる競技なのだ。最後の一球が籠に吸い込まれると、廣之さんは松岡修三のごとき雄叫びを上げた。



山田区民運動会は山田小で開かれる。合併で野田川町が誕生した1961(昭和36)年から続いて、半世紀にわたって上地、下地、尾崎、館の4地区が覇権を争う。牛田親子が住むのは尾崎地区。山沿いで新築が難しく、集合住宅も少ない。全世帯で90軒程度と、最も多い上地の3分の1しかない。だが、運動会には地域の半数近い家族が参加して、本気で優勝を目指す。一緒に玉入れの特訓をしていた山本朱里さん(8)は「尾崎は人数はべべ(最下位)やけど、やる気はいつも一番だよ」とほほ笑んだ。

さあ本番の日。青空に秋らしいうろこ雲が浮かび、頭上には万国旗がはためく。まさしく運動会日和だ。

ちなみに私は九州の大分市で育った。幹線道路に沿って開けた新興住宅地で、隣人と交わる機会がほとんどな

かっただけに、近所というだけで同じ色のハチマキを巻き、お隣さんに声援を送る姿に新鮮な驚きがあった。

ホイール転がして15年

応援席に黄色い声飛び交う。その雰囲気は圧倒されていると、自転車のホイールを棒で転がすレースが始まった。みんなよろよろと苦戦する中、青のハチマキの男性が風を切って駆け抜けた。尾崎の関小田薫さん(43)だ。「美しい……」。無駄のないフォームに見とれる私。普通に走るより速いのは？何日くらい練習したらそんなに速くなるの？興味津々に尋ねると、関小田さんは「もう15年やってますから」と汗をぬぐった。15年!? すみません、私の想像をはるかに超えていました……。

女子ムカデ競走は大接戦となった。40代チームが並ぶ中、50代の精鋭で固めた尾崎の5人は、号砲と同時に飛び出した。しかし、レースは60分もある。昨年1位の上地チームが追いつけて

た。それを横目で見た先頭の長島弥生さんはスパートをかける。「絶対に負けられん!」。ドドドッと土煙を巻き上げながら後続を突き放し、長島さんはゴールテープを切った。抱き合って喜ぶ熟年の「ムカゲ女子」。牛田麻貴子さんは「来年の連覇を目指して、今日から体調を整えるわ」とこぶしを握った。

4地区の中で強烈な個性を放つ尾崎だが、40年前は弱小チームだった。「低迷から抜け出すために、まず人を呼ぼう」。19歳だった小池信助さん(58)は、30代の先輩たちと奇策に出た。結成したのは「応援団」。夏休みのラジオ体操の後に練習を重ね、柔道着に高下駄をはいて声を張り上げた。これが大ウケ。翌年から他地区も参戦して応援合戦が始まり、女装したり腹踊りしたりと演出を競った。館地区は軽トラを1台つぶして、七福神のひな壇を作ったこともあった。「肥持ち」姿の百姓にふんじたことがある加畑宏さん(57)は「一見無意味だけど、今年はどうやって笑

わせよう」と知恵を絞ることで若手の結束は固まった」と振り返る。

「走れる嫁」大歓迎

青年の体を張った奮闘は小中学生の楽しい思い出になった。町を出た子どもたちは成人して家族を持ち、帰郷するようになった。小池将之さん(41)もその一人。大阪から戻り、宮津出身の砂里さん(41)と結婚した。中学校で陸上部だった砂里さんは、運動会に顔を出すと思わぬ大歓迎を受けた。「尾崎に走れる嫁が来た」「あんたが尾崎のカモシカか」と、応援席に人が集まってきた。妊娠中だったが、年配の人た

ちから「来年は頼むぞ」と声をかけられ、翌年はほぼ全種目に出場した。砂里さんは「運動会のご近所と深くつながる最初の日でした。嫁いでさみしいと思ったことはありません」と話す。

運動会中は盤にさしかかり、砂里さんは玉入れに出場した。右手でそっと放った赤い玉は美しい弧を描き、籠のさらに上の小さな筒に吸い込まれた。10点のボーナスポイント。尾崎は逆転でトップに躍り出た。大仕事を成し遂げた砂里さんは「練習通り!こんなにうれしいことはない」と跳ね回った。尾崎は大縄跳びでも1位になり、独走で2年ぶりの優勝を勝ち取った。

夜はもちろん祝勝会。小さな公民館の玄関にはサンダルがびっしり。お座敷は尾崎区民があふれかえていた。

「負けたら飲まずに正座して反省するつもりだった。勝てて良かった」。練習で「玉入れ必勝法」を語った牛田廣之さんはビールを片手に上機嫌だ。娘のえみさん(26)は神戸から帰郷して7種目に出場したが「いっぱい出るのが尾崎の若い子の仕事です」とまだまだ元気。運動会と加悦谷祭りと夏祭りの日は、必ず休みを取って帰ってくるという。

えみさんの隣に、近所の赤ちゃんがちょこんと座った。あやしていると、今度は中学生がだっこして連れて行った。住んでいる家は違うけど、何か一つの家族のようだ。40年前に体を張って運動会を盛り上げた信助さんは、浅黒く日焼けした顔を祝い酒で赤くしながら話した。「男女も世代も関係ない。きょうは尾崎の笑顔が集まる日だ」

運動会の直前に襲来した台風18号の後、道にあふれた土砂をみんなできれいにした。楽しい時も困った時も同じ顔ぶれが汗を流す。気軽に声をかけて助け合えるのは、毎年「一致団結」する運動会があるからだ。

お座敷を見上げると、歴代の賞状が取り囲んでいる。「優勝の記念写真を撮ってくれ」と頼まれた。多分ここに飾られるだろう。みんなで並んで、はいポーズ。とびきりの笑顔が並んでいる。私はうらやましくなった。ご近所だからというだけでこんなに仲良くなれるなんて、どんなに幸せなことだろう。私も仲間に入れてほしいなあ。「尾崎ファミリー」の皆さん、また遊びに行きたいですか？



かつては加悦・岩滝でも開催

野田川地域で地区運動会が盛んなのは、自治会ごとの体育協会が健在だからといわれている。自治会と協力して、選手の確保と技術向上を「地域の仕事」として担う仕組みがあるのだ。加悦、岩滝の両地域でも運動会はあった。岩滝町民運動会では入場行進で仮装行列を企画し、遠方からも見物客が押し寄せたこともある。ただ、選手集めは祭り以上に大変で、2006年の合併を境に休眠している。山田区では世帯が少ない地区も対等に競えるよう、複数の種目に出場したり、練習を積み重ねて一発逆転できるルールを設けたりして、やる気を伸ばしているという。

安部拓輝

あべひろき/毎日新聞・宮津駐在記者。1978年大分生まれ。温泉につかって育つ。丹後の幸にほれ込んで小4の息子と田畑へ海へ。妻の目を盗み、家を抜け出して釣糸を垂らすのが心の安らぎ。

あなたの絶景



今年から始まった花火大会 @ 岡島由希さん

8月11日あった「海山絶景花火大会」。阿蘇海で花火を上げたのは25年ぶりだとか。高台からは夜景と熱気球も見えて海辺を美しく彩っていますね。(編集部)



あなたの絶景募集! あなたの知っている与謝野町の「絶景」を教えてくださいませんか? すてきなものは「うちのまち」や与謝野町公式SNSに掲載させていただきます。次回のプレゼントは、運動会の景品の定番「醤油」です。岩滝の山と醤油より、濃口・薄口の一升瓶と刺身醤油をお届けします。応募はInstagram、Facebook、twitterのいずれかで、与謝野町公式IDをフォロー。それから写真にハッシュタグ「#与謝野うちのまち」と「一言コメント」をつけて投稿すれば完了です。与謝野町公式IDへのリンクや、詳しい応募方法は右のQRコードからどうぞ。お問い合わせは、与謝野町商工振興課(0772-43-9012)へ。

